



武江年表













夕暮を情こぞしあふ本のりよりあさき一色は海城の月 辰巻

寛永十八年 辛巳

正月廿九日夜桶町よりあふ海日暮へうけく鎮守町敷五十七町をぬ  
る百二平町殺慶を以てのたふとゆえん

○決り系圖二百七平巻成統 梅道春とて主殿居士おまび  
丑山の傍に候候ありしとあり

○東殿山五大師院へ巡行執事成る 上野五條天神社へて瀧天神

を合祭す ○柏村田野の草師堂を自局法再建

○二宿村を齋通町と号す えん六ある又改  
て十川町といふ ○白米高とて搦田よりせきと痛

福さる ○青松の貝塚よりせき室中へ福さる

○七月 兵令ありて薩山に生る子権現縁起撰述あり繪の持時

主馬の常あり ○秋米穀母子不熟 ○八月朔日大風船十艘の石

船取川沖ふ沈む

後浪人この西を根と号し漁獲す昔ありと云一説おきき十一年  
八月廿日伴豆は柏府川より大石を獲りしと云沈没し根を根と

○八月津田富東賞守子仁生るる像を立

興隆代徳及乃如  
宝海と人とあり

○北へ海舟於市行

三浦津  
ん他

同十九年 壬午 九月閏

正月朔日大雪 ○二月大雪 ○二月十九日淡草を焼亡

は柏村市系  
とりよめた終り

○二月十日源雪

○二月より七月ふあり天下大飢饉米價貴確一死人多し古救米

錢をもちる ○八月諸候参勤交代始る

○夏越中伝尋に古中向あり八月朔日法障法の日傳唐障一必要を

是あり事 曉ふあり ○二十二間堂始る淡草下建

基三人の由留町  
弓作は後を海治

正に大なる人あり法王誓言の法高地二十二年重造管ふし一志志取す付信の記あり



とりの山を築子つくしをめぐりて上流の流の終末をつのりてつひに流をたまたむるなり  
親世と八幡宮やまの久遠のありの形に似たりて正寄附ありと云々

○あづま物語あづまものがたり 吉原知見 記の始あり

寛永二十年 癸未

六月朝鮮人來聘

正使尹順之副使趙綱取事申竹堂後彼本替りて申すこと  
申竹堂より申すこととて林春祿喜連二上人本朝の使者を  
著せり

○今年六月癸丑生春祿子とて山王宮ありを著りて  
祀ありと生とて集ふ員也

○羅山喜祿二上人生上京癸未記行あり

○八月永代橋八幡宮を重修始ふ ○十月二日天海傍正寂敬百二十  
二とりの

二月より毘沙門堂海傍正清住職あり

○十八年の冬より今年まで肌腫かさ續りり ○あづまめくら板城二を

給書心を色着滯と云一也子居ハハ代勢と梅の花を弄するはま一と云又中  
とるを著りり色とハ梅の色着と云うづの膏とりの急ありと云柳とて氣の  
記の始あり

世年間記事

井上稲富とて大筒の町間を試らる一不を後漢とて鉄炮例とて

○正徳比舟才天の寛永中天津傍正の某とて一とて比敷山の權行生

を撰らるゝんとて各竹葉度傍正とて熱熱とてるが旅漢京川正書

の手傳人具をてて正利終りて后世を由を撰らるゝとて一とて一とて

○久保八幡宮再建あり ○佛日山東祥とて正安中麻布具とて

板倉宗判あり一とて寛永中今の宮偏の比とて極とて靈とて一人居基

のちのまの板のたををたると云

○寛永中子日谷一行院家基本参上人寂

○海城橋とて松尾橋深正橋迄の川通り

○同春不動寺勅板の字序不



ありしを半地を今の所より下しあり

○寛永の以まて新田佐柄本町継子町の隣きふ若丹後寺殿は左邊  
ありし丹後殿前と以を畧して丹前より北邊風呂屋敷と改稱  
ある湯女もありてさう不遊ひらる美人木のさぬを奇舞妓と号ひて

丹前風といひしは流書ふらん元とさふ不畧一川  
後永の五年に寛永  
の東正保の以下を

○寛永九年梓河の江戸給景ありひびき町  
より先新田町と皆海邊なり後永新地を築きとてあり今の

後永の所より江戸の所より水とあり  
おとせりる長  
の川と合はる

吉原町ハ廓内ハ江戸町すみ町京町新町けん蔵町とあり  
善徳二年の  
築きけり

思案橋ハ今の荒布橋と見えたり  
今小細町ハある思案橋ハ  
昔の志安橋の取手あり

東新田の地も武家方と院の  
おとせりる長  
の川と合はる

あり同前向より南ハ丁地まで殊小と院あり  
大橋寺慈眼寺今在り  
不動院これと云ふ

今茅場町東作事のある新小長久とありけり  
おとせりる長  
の川と合はる

町名今と違へるあり  
今の日本橋  
計店の邊

六十乃河原  
大橋寺町裏  
今云橋田

青柳町  
今お替丁と後河丁  
のりあり

新小田原町  
三河丁の橋標之者や  
多くあり

新小田原町

大橋

同前町

大橋



後後橋

今長後橋あり實文  
との圖も多記せり

二ごくとぬ

今の所  
あり

以上寺院の号町名文字詳ありされい系本不極りて改字のまふ記に

○江戸繪圖梓抄すまの實永水不始りあや其より此のの世不

傳りて此時代の圖とある世の橋よき世に記しありぬ此橋欄町の

入は沼池を隔りぬ小川町新田川濱若橋を隔りぬ大川を隔り

て截る所の方城按善後源の圖  
もこま小同實又記より此本不度くも記り

○世上通用の書翰の記改不一筆書と改ゆと書く事記にり

始ると見えたり女子の一事と書おひ事の事たふふとぬくこと

ありとよかん 本海濱翁系  
写ふふんえり

○本村孫十郎言致る續武家因後云按兼實永の末ふ記にり

お東ははるの枝竹とりやりのを月小是きと書るの以は田長門す

始て製は昔終も稀ふまき番の徳士お具を本橋終入是を  
番終やりぬ付りて世をくくこと

○薩摩小車泉及根の序  
武紀後度と云記にり申橋小終り探芝居を興行す

薩山先世と同陽後耕の二子を誘引てんれせり○事跡合考小澤獨唱

語後終終人形也考悪く實永元年以後退く京大坂よりり

一のことり

○お浮踊りひんごかあより所橋あどりつ小唄行尾崎女所記  
りつ小唄もこの

附代のり貴族勢を畜ひ椿花を弄ぶ事あづみめどり  
小實永の改の  
事りおをりつ併ふり

うんたなをいひせせり親世うあまひ今春うらへ  
さんあぬの羽打を交りうけり用ある死せり

○中島澤雲いりの記にりて求犯旅を創り始む

○春屋獨語おぬ實永の頃風俗男の草のうらけ草の袴を



其後、女の紫草の足袋をさく我能たけまひとせり、婦女乃  
 帯の合子様をいひ、藤の治と一玉地、小梅、桐を布く、小織付、是を  
 鉢のよむ帯、よむ付、て、臨き、けり、度、さ、い、づ、小、練、尺、の、二、寸、斗、の  
 紙をいひ、い、練、ち、ど、入、る、事、あ、一、に、月、と、り、八、月、ま、く、婦、女、の、礼、後  
 小、練、あ、く、度、さ、練、尺、の、八、寸、と、り、成、を、造、り、結、ひ、て、た、く、を、付、帯  
 と、い、ふ、今、の、い、も、あ、帯、の、首、の、帯、よ、り、も、度、一、中、畧、男、女、の、衣、後、首、と  
 極、く、質、素、あ、り、男、子、も、女、子、も、十、に、必、才、ま、て、い、ち、ち、社、を、さ、ら、ふ  
 む、う、の、練、尺、は、七、八、寸、を、極、り、と、せ、一、に、貞、享、の、比、の、り、五、尺、計、十、  
 あり、ま、と、り、中、り、中、り、ま、い、く、長、く、あ、り、て、近、き、は、二、尺、に、必、寸、月  
 あり、ぬ、と、見、ゆ、婦、女、の、帯、も、貞、享、元、禄、の、比、の、り、も、漸、く、度、く、あ、り  
 て、今、の、練、尺、あ、く、八、九、寸、お、及、小、練、を、志、ん、と、一、袴、の、ご、う、と、こ、の

肩、衣、の、い、の、り、の、首、と、麻、の、幅、練、尺、の、八、寸、計、あり、一、小、貞、享、元  
 禄、の、比、の、り、幅、を、尺、お、及、小、寛、永、の、比、の、り、婦、女、細、糸、麻、繩、を、髪、を  
 造、り、て、よ、と、を、巻、き、縮、め、く、巻、一、ふ、く、後、麻、繩、を、止、く、紙、を、さ  
 ら、小、織、前、の、糸、と、り、粉、紙、を、て、元、結、紙、の、い、の、り、の、を、造、り、か、く、紙、を、さ  
 肉、の、婦、女、皆、是、を、用、い、ま、と、り、縮、め、く、巻、事、も、止、ぬ、と、中、畧、江戸、の、婦  
 女、亦、小、あ、り、お、む、う、い、ま、ま、と、り、巻、き、縮、め、く、臨、面、を、包、く、目、が、う、り  
 あ、く、と、う、け、り、其、後、練、ち、あ、る、臨、面、を、造、り、み、一、八、寸、二、寸、あ、り、寛、永  
 の、比、あ、り、き、今、と、り、い、ち、ち、練、を、造、り、よ、り、い、ち、ち、の、い、ち、ち、面、を、い  
 ら、あ、く、と、う、く、い、ち、ち、か、く、紙、を、造、り、送、を、り、中、畧、男、の、面、を、あ、く、と、い、ま、き  
 の、後、小、織、は、編、笠、の、肩、の、上、と、う、く、を、う、く、入、野、と、う、く、い、ち、ち、の  
 ち、ち、帽、子、を、う、り、て、面、を、く、い、ち、ち、あ、り、た、の、臨、中、小、後、面、の、あ、く、く



ある物をつらり付て目計りをあまそくたをぬりあり亦此の  
男ハ小社の裏を知り或ハ社の肌衣を社にぬりて統をまじり  
計りし多ひしゆりゆりゆりのぬく見ゆ如くして標の裏に衣  
あとをぬりあり 下畧足ハ寛永の以てり元禄の以てり風俗を云  
きなり その以婦女の塗蓋小社の總箱六尺袖きま中葉草の  
長袋ホのひ山東の骨董集寺跡考下つまひしり

○八水随筆云世ハ素襖の袖を切て上下小一りハ松永強  
正始するといふ事よく人の習ふあり麻上下の裾を切りし遠  
くぬ事あり襦袢上下ハ小坂遠江葉の給はる小姓小始て忌  
せしき一りいふまりて今常袴とまきり夏の肩衣小袴物を用  
る事ハ松平豆州侯より始る源子肩衣小襦を用ひし小始  
遠江侯二男政尹よりまるといふ又老人雑話ハ編 に村きぬ 肩衣

ちんてん 半濟ハ迦迦龍山公小始まるとあり

○本綿長袋今ハの製法の如くあるハ此と意と衣の母始て製し葉る  
しあらしし時とせしれハ老人雑話小見えたり

○今昨ハ越前守家思寛永中大和村長并 越前守生を連て  
江戸ハ一向 後京小坂  
にて終る 大和守所方並 津清ハ此時江戸より船鷹之  
年迄全席とあり後京小坂より子孫代ハ江戸小坂也

○寛永の頃大徳寺町の豪家佐久ら其の家の子女をけとりて  
に意の志厚く朝夕の飯菜菘菘食會ふつた物をと馬人小籠  
一ハ身ハるまの残まると又ハ尻の隅小細を切てたまり物と  
合ハ常ハ小袴を穿るるハ一志ハるハ小袴比企小袴ハ河ガ  
ハ志湯越山ハ糸袴ハ生身の大目如葉をぬせんるを脱ひし小











○十一月十二日 台命ふより王子村小治に松平藩刀匠大迫相

貞行あり 三つ切の事あり十三日南に十乃二年板取の事あり

○十一月 眞福茶屋より後向ふ比治所まで 正徳春海法下道より首領の御方より

世年間記事

正保中日向玉寄湯山の瀨頭を藩刀匠より大坂へ送せ大坂より京

下へ送るに内宿士山崎角と名付りりの大内小止めめひ面内無

二唐松の三種の御唐二年の以武江小下をまより 播磨にて世

忍ふ分てり ○大橋を常盤橋と改めしれは正保の始にありり

○十河ひさひとて家をぬく事ある十河辰とて武家の人乃以

はきとてりいひかゝる事と世又此時代迄美濃郡長を好む東海乃

名所記ふり祭を世の聲小橋りよとてりりハ松虫のし声

とふやんとをねさせたるを以て河ありとて

○世事終るに時代京室町候の久吉仙の御書を賣始むる後

二傳市仲字成徳の早川是を製書して江戸にて世の大好書

脊中書右とありと始とてり 寛文の事あり寛文申室町より目一書房

白水とりり女形波見世を以てこれ此店の大祖ありとありりりりりりり

實に此保の所あり髪立の更や世より格別上下とも不幸美き田男の髪小池と

○寛文正保の以長湯より唐本の商人和泉屋本之助といふの

江戸より池の惣小治り始て古書籍の賣買を以て後大書籍

也と云ふり是古本賣買のよりわとて

○或は家の不徳小正保申江戸國の官本ありり方城を度一河川

源若南若梅本親司治致込ふりり東大川を踏りて此市仲の長



實永の國不第一島中津若毛後所司越後は廣の隅下下赤  
が居あり日本堤の角ふらうらん塚とあり谷中二浦坂の辺二浦  
飛と助後由廣あり本敷山の東向ふ門あり門前并七後下橋正  
町中りあり

慶安元年戊子 正月四 二月十五日改元

慶安中改元ありしを

改年の法慶安徳の天下也 平井卜養

○春荒蒲山小亮朝院七面堂室基あり 實文十一年今の如  
き田くうりや

○谷中妙命院七面堂勅清 冥山日相上人と二匠の房身丈七面堂ふ日のも  
系院一後中不籠一板を蔵し一尚社を創と云

○正月十一日天海僧正と慈眼大師と強号をあらわ

○日光山三十二回済忘済法念法華八卷あり 後永の系編法元八卷の元  
あり

○五月男をむむひふ中樹尾尻犯せり事を林せしむ地時行集

麻糸とりつる英が年の事ふ付強初ふ及びひり昔く物治る

りり男色の事此きとり止寛文の頃小りり又行色一りふ少

ありて止つるよう同書小りり 昔のうふふ小男色をあらた尻堂時道と云ふ  
尻及ふ尻尻の尻及ふ尻席の尻と云編後

○九月吉田姫稻行社建立 尾林兼次と  
云人寄附に

○江戸中風長屋の遊女法割林あり

同二年 己丑

日暮里諏訪明社社造堂 尾上六兵衛の弟  
相ありと云 ○大塚善門山大慈寺法華堂

○二月日持社より尚徳堂 同十七年一本慶安  
二年正月七日云 ○麻疹流行也

○六月廿日武蔵大蛇患江戸中武蔵町屋溝に死人怪人等 上野  
大蛇

○五月十三日河越大敷障 重廿二斤小  
早倉人ら驚



○八月廿日江戸大地震 ○九月琉球人來聘 正徳具志川王子之 日光山へ参詣

寛文二年 庚寅 十月国

二月山王権現社 河内より梳町へ移す 一説は寛永七年より移すとも、以後万治二年今の所へ移すとも

○男女停勢そつぼう 宗廟へ参詣する事行す 今云ふは、参りあり

○二月廿二日夜江戸大地震あり ○四月十二日狭容懐隨院長を請

死 主僧人は不給交はつとも終くともて定うあるは、横暮へ今も浅草源空寺あり 拜拜の年田を吊り ○五月國へ渡る

○六月二日法園毛塚 長に、又寸 ○六月二日より浅草寺親善寺より普濟院

○琉球人來聘 ○仲井絨起 ○八月七日秋父那急大風氷降 大廿八九

女より十文位

同記年 辛卯

東叡山 清宮清造營

四月落成、廿五年に造るを、一と清再建あり、一といふ

○二月十二日狩野山雪率 六十三、七 ○秋深川八幡宮を修す、是の法

或きうへ流編了、無行始ふ ○中村勅之命を居稱宣町へ移す

うらる ○十一月廿九日仲井の堂敷除けせらる

○十二月廿七日管中威敷と日長上人寂

此年間記事

酒造りの事行す、慶安のより大塚の地、黄檗坊、池上の大徳丸

底源をいひ、改名せり、大酒の業堂を結ひて酒を造り、事あり

を、額東を記し、水記といふ冊子あり は、寛文三年、小下りせり、池上氏正徳、池上氏の事あり

寺、海老小見えり、又川崎、橋本、田原、慶安、子孫る、後孫、たより、せむ、七、合入の、まあり、中、小、押、の、給、あり

○寛永永の末、兼、慶の、以、ま、令、報、た、智、の、り、事、波、河、町、友、智、町、乃







今年玉川の上水を都下不通して元禄の用も充たぬあり

○玉川上水の水をくぬの方甲及丹波山の嶮谷小瀬一同に丹波村を

つて武蔵の摩耶谷とぬ甲及一の嶮谷より又津浦村と七里原まで

羽村まで十二里までつたると十六里計して羽田浦より海へ倉に

元禄十一年 兼夜元年の春玉川左衛門兼清を遣つたりとの事なり羽村

よりいふまでもその事を考へ同十月上旬上水は割の儀を命せし

おれの翌己未初夏より仲冬まで羽村より江谷大木迄は橋一

虎庄門まで玉川の水を掘りてとて之を後法方武蔵方市中

小分水して日用とす 虎庄門外玉川管轄地との玉川  
左衛門の御説するところなり

○神田上水を園き一事ハ之を始むるは武徳編年集後小太保

集天正申ル 旨命を交へぬ道を考へより又摩川の津島水

小石川より引ぬるを〜とて又神田上水のある〜 せんりす

小石川を引ぬるを〜とて又神田上水のある〜 せんりす

玉川を助ぬるを〜とて又神田上水のある〜 せんりす

友堂家より引ぬるを〜とて又神田上水のある〜 せんりす

善法寺行〜とて又神田上水のある〜 せんりす

〜とて又神田上水のある〜 せんりす

〜とて又神田上水のある〜 せんりす

〜とて又神田上水のある〜 せんりす

神田上水は井の沢の池に落 多摩郡  
年礼村 善法寺池 同郡摩志  
の旧跡 妙心寺池 同郡

又摩川のより水等の流流中荒井村の末より合へて神田上水の



















○十二月十六日茶人令森雲以度率 名長迎号宗知

明曆二年 丁酉

正月九日谷竹町火事 日暮坂町火事 九日吉祥寺邊中町  
 火事 ○正月十八日乾大風 幸刻より幸にむす目裏幸妙とより火  
 陽浦津田を渡り津門内町通通町筋澤倉の岸系橋八丁地  
 早瀬を渡り後船海多佃島深川を過り翌十九日巳刻より石川河邊  
 新通町より焼中一牛込出づ田安出づ津田橋出づ常盤橋出づ  
 長後橋出づ門八代海河津大島津新幸橋出づ門焼亡又同日吉  
 町 朝町又丁 通り火出づ幸橋出づ門の弁橋田鹿出づ門幸家下橋上吉門  
 目つき 前札の辻海多まで焼亡此新焼万石以上の庄屋あり百餘字は旗本  
 七百七千餘字組一組を救救をあらはに幸社之音平餘字町屋

二百町斤町八百町焼死人十萬七千五百六人とりり後て幸庄下  
 二町四方の地をのみ非人を一々死骸を船まで運り後て築て  
 する院を建てて山無物も回向院と名の事ありあり 去年十月の  
 高年正月の  
 舟小を渡り交ふ一廿一日小島で大島津承價一財  
 舟を揺りて旗民の困苦を志し路に悲泣 正月廿二日より七日の乃火災小  
 幸あり 合中て十六万あるに二万小  
 二萬をいれ六八千つくり を下りあり 囚獄の罪人を火の財放  
 たりしこの財より始まる  
 幸あり 合中て十六万あるに二万小  
 二萬をいれ六八千つくり を下りあり 囚獄の罪人を火の財放  
 たりしこの財より始まる  
 幸あり 合中て十六万あるに二万小  
 二萬をいれ六八千つくり を下りあり 囚獄の罪人を火の財放  
 たりしこの財より始まる

視吾輩集 江戸田祿の後収小庄をあらはに幸人むむを刀で  
 六月今の地引りり新吉原町と号し八月より商賣をあらはむ







○世時武家の属邸後時多一又寺院も石替あましく方吉祥より  
 あると橋より為はし橋。また橋田名吉祥と橋とて一因と表つたの事ありあるゆゑに  
 霊山より海空寺法禅といふも湯治ふたゝら大火後焼たへり川が  
 瑞林寺も湯治橋より谷中へ橋を敷設する八丁橋より法系へ橋隨之  
 院日瑞寺。今の舟葉又橋の西へ 哲智願寺。今の小 井田より湯治へ雪道と天嶽院あり  
 東門内より法系今の地へ橋を

○世時代今の如き英会を南人の文子と一法馬又後合勢山乃  
 門より始て菜飯豆汁黄湯大豆をこくといふ事あり東と名  
 はけくおせしを江戸中橋より合勢山のあゝらお喰ひふゆん  
 とて縁の糸ゆきしれり小真しつゝあり

○浅草見附前を屋敷五十年法無屋利を築くといふ事あり

猪牙船を創りて山音通ひの案こまふ事あり又所々より記さるる所

ありて通ひしもゆりしあり  
舟海老も湯の系紙小妻一 その日のいと  
 申のつて折る事ありこれくそふきさる事あり  
 置徳紙料小なり 以はね舟  
 置徳をうつもの山へのうけの  
 ぬきひかり  
 ○湯磨に奉山崎膏淋の遠遊記行し鈴ヶ森小舟泊り

つゝありこまを橋に下り声鈴のわしを以人諭をあり兼  
 のひまもありしありん○竿曲柳川檢校八橋檢校行る  
 ○湯磨三年の江戸國大坂町 今大橋町一丁目  
 うゝ橋とあり 阿比の町 今小舟町  
 二丁目あり

あり 井田院橋町の湯治并奉養とあり  
 万治元年 戊戌 十二月間 七月廿三日改元

正月元日夜市谷安養寺と世秀養の養ふ御衣の老翁形を  
 和舟を源一白瓶とありしあるとて信前社を建てる



とよりまげん著しと江戸妙子まごのり

○正月十日早あけのりめよりあけ引換ひか江中江中大羊大羊焼亡焼亡  
東洋

○二月本本挽町挽町海海をを坂坂小日向小日向築地築地をを築築  
年比山麓山を築土の築之  
小日向築地の此この山を

引田引田をを地地取取をを  
あけけり ○二月十九日二月十九日持持時時素川素川後後改改率率  
廿二天  
和記

○六月九日六月九日持持若若是是順順死死  
中村劫三  
がえ祖あり ○夏夏三三田田のの地地小小舎舎はは度度出出別別

持持のの地地ををめめるる地地のの後後辺辺廻廻るる老老朽朽小小徑徑一一喬喬而而流流なりなり別別廻廻極極と

持持ももままくく松松樹樹をを植植くく遠遠路路をを標標せせり  
寛文二年夏弘文院城  
惣之は田舎の記を記せる

○程程公公師師等等氏氏寛寛永永中中花花子の子の程程をを考考るる後後道道世世々々

道道沖沖とと長長一一橋橋切切然然永永とと鏡鏡比比のの辺辺并并徑徑一一口口のの鐘鐘をを鑄鑄く

とと然然小小平平堂堂再再建建のの額額をを記記又又池池のの中中并并并并才才天天のの小小祠祠を

建建たりたり今今年年七七月月廿廿七七日日七七千千派派方方一一くく終終せせり  
洞房宿堂  
和記

○八月江戸中中發發結結株株一一町町小小幸幸々々下下八八百百八八株株小小宮宮をを按按すす江江町町

板板八八百百八八町町とといい事事此此時時代代のの事事之之  
寛永のあけめがうみ  
八百八町のと記せり  
今六千六百派町小

及及りり○今今年年日日本本橋橋内内善善法法院院○九九月月十二十二日日唐唐僧僧隱隱元元禪禪師師

持持良良善善門門とといい江江府府小小来来りり一一州州湯湯河河禪禪院院小小七七十十派派日日邊邊

為為りり更更儀儀群群集集也也  
この時數  
六十五云 ○溪溪川川海海福福寺寺宗宗刹刹  
崑山張  
元禄師

○同同淨淨寺寺宗宗刹刹  
崑山日  
義上人 ○日日暮暮里里經經王王宗宗刹刹

○去去山山崎崎園園蘇蘇翁翁江江戸戸小小遊遊秋秋為為るる以以遠遠遊遊紀紀行行あり

○今今戸戸村村百百姓姓九九帝帝君君がが男男九九帝帝助助加加中中のの事事をを一一編編為為社社を

吉吉系系くく後後以以是是をを九九帝帝助助為為るる事事○九九月月明明のの宗宗師師國國姓姓翁翁

鄭鄭深深切切本本邦邦板板其其をを修修すす  
名不其能又森官といふ今年三十九云  
あり 日本ノ寛文六年小卒也

○東東海海乃乃名名不不記記成成  
長井うさ作  
寛文中板明



万治二年 己亥

正月二日より二月廿四日まで火災百廿五及小及大者人安らるるあり

○日本橋を掛返らる或は小若無き橋を去り

○二月山崎雲霧舟再江戸遊八月帰る再遊記あり

○四月廿一日水田子協山王権現社今の

地内造営今日内遷あり舊地内堀堀ありて是根屋の内を去り乃を阻て山子去り社地狭く火災の時其地

○朱鷺水先生明末の札を遊朱鷺水先生明末の札を遊

○七月二日大風暴あり朱鷺水先生明末の札を遊

○九月深草元治法作母を誘ふ朱鷺水先生明末の札を遊

死乃身死乃死とりの身死乃死 万治二年

九月五日池上よりくる上人翁仲の如くおととに法を授けて衆を江戸に

日本橋邊日本秋 更無一事掛心头 今宵新見江城月

影満扶桑六十州

せききわふ並居てつましくある所江戸唐の如きまとの又ころんふんつとちや

ふさふさまていままち新も様ころも神の思もむさの月

うたあううほひもまこあーち統治の秋をいた武彦時つと

月もまふと山ひつをせず國川越ひきおぼの藤号今

○下谷水田子下谷長者長者町ハガキ 恒居の如きの墓とくありと光院本表

玄安居士万治二年亥九月廿九日とあり年号新くけはハ銀



けきと長安の子孫おこの業あり

○新田川堀割の事仙臺彦彦へ命せしむる今年由普信始る所年  
あつり大川より柳東通り水茶のあつり約込吉原より舊七瀬へ  
外込あつり清和郡中堀あつり大川へ通流し減る以揚土を以て大川  
小日向小堀比お  
東武家地と後には赤坂堀神下より同白ふ初里を田畑ありは川川  
小川へ接てあり版田町下の堀とありは川川の堀田ありしとあり

○今年より平所河川後地浦小地を築き道をひらき川を舟橋  
をこし武家屋敷小地ありは後天和二年回向院と今の  
津重と屋敷店の通り町屋計ありは舟橋下の武士地町屋なり  
て元の田畑とあり元禄元年又昔の舟り武士地町屋とあり

○十二月靈巖も深川へ移りし海町屋とあり  
以比者一田舎をせし  
半橋をいり社のみ  
今よりあり  
○十二月五日吉原二浦屋の女妓を尻死轉巻ぬ身伝女と云

山登春堂院の事あり又同西方よりありて万治三年とあるは誤あり祥世とむ風ありろ  
らもろろの如きあり 是より後を屋敷あり山登類の事海老もあり又押亭前  
の事尾考二冊あり ○今年より江戸町へ新道ありはあり

万治三年 庚子

正月十日十八日大火ありは武家屋敷あり

○吉井史命院七面宮再建 ○本町回向院再建云云

一字を刻しあふ徳養といふたふ春日社を合佛を唱へ振上る相像の形を造り安ん  
又山門を造るありは二世恒願とありこの山門元禄の火災も罹り今あり開けし  
は陽代ゆきの道 幅は長九十九寸ありは大橋とありは後には  
橋とありありと云一書ありは二書ありは三書あり  
○兩國橋始て掛る 橋は長九十九寸ありは大橋とありは後には  
橋とありありと云一書ありは二書ありは三書あり

始り寛文元年小堀枕とともいふ屋敷といふおふ今のあふ橋は古か川上より  
交りはるより新設せし小川村随員今の西を具立て云上り掛けをよりしは方  
流矢の事あり

題 兩國橋

鷲峯先生

扛梁新建枕長流

人是陸行吾在舟

疑似猛竜横卧勢

武江年表卷之二



總州為尾武為頭

○本挽町五丁目小森田を所領し開始せし居真行は後代に功徳と号す

○五月霖雨あり○九月廿五日に基前二世大橋宗桂率二女按上行ちよお基前宗桂の孫

○むぎあぶら二巻拝行後唐大火のつと祀せらるるは虫の腹中より

此年間記事

上野小令銅二丈二尺餘の大仏の像は唐万法の以本會澤雲再建せしむるに流伝し元祖より守りて是也

○廿二日は信務神社勅造

○大久保法皇より七面宮勅請○明人陳元寶波團の札を遊さるる本邦より江戸三田巻町永島山本島より小幡居まを流浪人後村七赤巻の磯貝次所長より之浦と次を賜ふお流りけり明人を捕らるるありはを杖を足る小志ありありといふ二人は形を

紀創流業湖の始

元寶寛文十一年六月九日八十五才ありて尾張小幡より紀創流業湖後村氏より田長宗持より中々安永中の人あり門人千餘人ありあり

○万治の以後長所於川の辺より酒樂よりる後次江戸より法人の懸け紙帳の月々入るる時お八人の役を頼りておたり一代女よりる若狭よりりり人等のよりりあり

寛文元年 辛丑 八月國 己月廿五日改元

正月十九日の初光相ありりわへおふり光相守町殺めりり一天

○正月廿七日會通町より火火の辺能治橋宗橋の辺

本換町まで委家方町を殺し焼亡○勅進相樓今年より毎年

續く真妙も○二月より浮勢宗廣一男女を流する事疑り

○二月十二日林漢耕稼率三十八才名も務屋の國三子











入魂一人くお入魂らば年中御宿男女の蝶好等の汗黄く物物を更あつら或徳意の息女娘色の事お付備をうまふくみまをせしうらまの事おれく寛文を八月退給せし其はよりし縁計をさか人をおき庵といひけり

寛文六年 丙午

三月廿六日人形のお光おちあふ名二女服

○ふしのふせ東叡山鐘樓建時の鐘

○中村幼之助うき居お熱瀨をたむおき居る居奉代記本の巻末ふんえり

○九月一日林梅洞卒二十に才名教号梅洞幼亭後年春伝と稱す

○芝金杉海多百餘弓の地を細平協介澤原一月十戌年九月町割ありく新網町といふ

同七年 丁未 二月四日

三月府中六所宮法再建

○四月赤井大納言下向の町南田川を多

多社名の町を是て隅田川に流し多入新設中

○五月梶井宮隅田川に遊覧あり

おとせん多り御まといくとくおと遠寺隅田川に

○七月の末赤川増江神道の字をり惟旦の氣の神池山寺

殿をひらめをりて殿を祀せし念又舟をりて世に實せしる御書集 本所の社地跡の板神植不りくおの叶ひなれ

神植のおひもをりて老のまき立をりて作し所代り

あやまり本のをりて終るをりて世のまのり

をり三首あり社地をりてりて地室中のりたり社地と云ふ比の社地あり本所



かのうらふ年のところとあるは、  
はらうり年とせしむるは、

○目黒直指院揚巻寂守道入定次  
直指院の揚巻とて本食の  
聖あり念佛の願を刻  
あふことなす子孫の安んずるに  
年年二月彼院の始年十月廿日  
乃心ありて世の中のをを感  
師を拂んとて剣をりて穴小入  
を十月廿日小入を念仏返す  
一とりの以上記の又を畧す

寛文八年 戊申

正月廿八日乾の方より雲の方より  
○二月初日未上刻牙込酒井  
士町市谷田町小入同日又市谷  
屋敷の通同心を上津瑞瑞坂

正月廿八日乾の方より雲の方より  
○二月初日未上刻牙込酒井  
士町市谷田町小入同日又市谷  
屋敷の通同心を上津瑞瑞坂

町二番町穠町一丁目より六丁目  
あつひ小辺を寺の方新橋まで  
出火駿河邊新田橋孫倉河原日  
一筋ふあり寺の町屋敷く焼  
よりあつひ大名屋敷新火

○同月四日辰少刻新橋より  
日る霞へ先火より二田寺町  
又同日中谷東坂よりあつひ  
所へ先火一二の橋町屋焼亡

家よりよりあつひ新橋通町  
のうらふ入又柳原屋敷を  
武江年表卷之二



坂をまて焼亡 古之日の少平年武家屋敷二子百餘軒町屋百  
二拾七町餘寺院百廿九宇百姓屋敷百七千軒といふ

○二月吉原廓内より新芝をひく丸塚町伏見町と号凡伏見丁の  
年寄の  
古塚ありぬく  
名つけしとぞ

○二月幕末由下向此時

月夜も林檎木ありて作き見ゆる雲を雲方の海士を名号凡花を井  
雅章公

○夏徳忌早ひさし ○正月より切先由りぬく是と云ぬまの  
はつとり 虎の由りと

幸指由りのるく新橋を搦く

○形宿より半里の坂塚村并土中を穿ちて合像五寸の観世  
多をゆかり背せ子刻して弘長二年二月とあり里人ミナトノミヤを  
宮て安あん重ち中ちゅう夕ゆふ敷敷の観世多是なり

○十一月十二日後八代即系率三十五 ○歳事小寛文八年江戸小世三番の  
歩行後ありはる  
と修くれと云い

○昔くお徳おむるゝお徳又おむるゝお徳は十八歳子日  
万日の圓向杯とて人集はる事あり寛文中年お徳とあり

寛文九年 己酉 十月日

二月に日流茶十五堂焼亡○二月之日流星アキラ東小流雲の如く

○奉公人が替り二月二日ありし今平より二月六日と改る

○飛戸を満家社地不法性坊を初清し社を営む

○七月旗美人礼をまはし十月までお松前度より平おくる

○七月十八日俳人石田本博率八十餘文流茶  
世修り并華 ○八月十日大地震

○大原河原屋あふちるいふち災毀以 災後人依る亦久左馬の寺并長た馬の町  
常雲泉市大馬の馬あり



寛文十年 庚戌

五月十二日辰下刻より巳半刻まで崖の如く成り降多小丸とて人足六

○八月大風 ○予翁傍於不忍弁天社の御下地を築立小堂此のこゝ

を建内郭の善籍を収て法人小と一まけ一々級と一む天和二年

学寮を立玄籍其のこゝ ○本朝通鑑成二百七十二卷

をこそけりらんを撰山我書家二先生編輯

同十一年 辛亥

予翁傍於不忍湖中於小築く下の地一掃落を建る

○白金陽重を宗剣屏山本菴所 ○七月後水尾法皇を飛戸天満美築船所之

文一由震等乃額を賜ふ ○青山油蔭を宗剣

○七月琉球人來正徳令武王子 ○八月廿九日南大風雨波あり徳系下管

同光山一集詩を ○十二月十二日晴天震動あり徳系下管

修きおん人お麻下之おさる中お辺のおくお掃落を

おふおさる六々掃落五十万お掃落を

皇田所あり所降

同十二年 壬子 六月

二月二日年込澤猫橋坂敵討あり壬子年係八つりおりの堂をくくひ親のくま

同姓軍人一統を討ち遠流おませむはごと

はごんお死むくさおのひとりおありその以の相争けり

くこれまこ

○二月勅を左津樂小島登以事を止らま大佛を寄せ町中勅を

以てけりの兼らぬがうき足結の行人お中穿撃ありうぐらうぐら人偏洲蒙

男行獲(刃をうつ)おきて圓景小のせお熱望の

形のお黄おを提明あり ○同六月晦日大橋流等道祖大橋を改率お改

邑堂をもち結

○七月十一日竹中元俊秀伝率八十五才

此年間記事

不忍弁天の島へ石橋を造りて東信の通河と云

○品川津殿山へ橋を造りて



○軍学出山鹿甚五た鹿名書并 寛文中津を犯し名書并 津野原

の郎小幽せしき延宝二年小あり先返さる貞享七年九月十日

山藤流十八郎の 世事治済御世 〇江戸より代八車を修る八人の内小代る貞享七年

世事治済御世 〇江戸より代八車を修る八人の内小代る貞享七年

〇始く元結を創御世 〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年

〇世時代男俘連六方組あり貞享七年



南二丁目経路加々漆板とあり  
鄭の布をかり奉  
こまに路るん

武江年表卷之二  
 南二丁目経路加々漆板とあり  
 鄭の布をかり奉  
 こまに路るん  
 武江年表卷之二  
 南二丁目経路加々漆板とあり  
 鄭の布をかり奉  
 こまに路るん

武江年表卷之二 畢



